

12月に入ると、3年生も、中学校での授業が残り少なくなるのを感じます。国語科最後の文学教材は、中国・魯迅の「故郷」。もう何十年も教科書に載っている、有名な作品です。

20年ぶりに訪れた故郷に様々な思いをはせ、故郷に別れを告げるストーリー。読み進めると、心に深く沁みる作品となります。

毎年最後に「みんなにとって伊里は故郷（ふるさと）だけど、これからも住み続けたい人？」「一度は離れるかもしれないけれど、やがては帰ってきたい人？」「伊里を離れて生活するだろうと思う人？」と聞いてみます。ここ数年、「ずっと住みたい」「やがては・・・」をあわせても半分くらいです。もちろん、これから先の生き方は誰にもわかりません。結婚・就職で離れる人も多いかもかもしれません。

伊里中で生活していると、「伊里の生徒は、地域の方に温かく見守られている」と感じる人が多いです。今まで数校に勤務しましたが、こんなに地域との結びつきが強い学校もあまりありません。立志の会しかり、3年の面接練習しかり、地域フィールドワークしかり、マラソン大会しかり・・・。いつも地域の方が温かく応援してくれています。（生徒たちはそれを「普通」と感じていると思いますが・・・）

きっと、伊里を離れたときに、それがどれだけ幸せなことだったのかを感じることでしょう。幼い時から見守られてきたことが、大きな力になり、つらいことも乗り越える力になるのではないのでしょうか。

いつか、故郷・伊里の良さに気づく生徒に育っていてほしいな、その良さを引き継いで次の世代に伝えられる生徒に育ってくれると嬉しいな、と思いながら「故郷」の授業を終えました。